

## 東京湾の湾奥部における水中灯に蝟集した魚類の季節変化

酒井洋一, <sup>○</sup>茂木正人, 河野 博

東京海洋大学 海洋環境学科 魚類学研究室

東京湾の湾奥部では、これまで小型地曳網を用いた干潟に出現する魚類の研究や稚魚ネットを用いた研究などが行われてきた。本研究では、湾奥部の魚類相をより詳細に把握するための補足的な情報を得ることを目的として、灯下採集を行った。

1993年5月～1994年9月、東京湾の湾奥に位置する城南島海浜公園と東京海洋大学の係船場において水中灯に蝟集する魚類の採集を行った。採集は毎月1～3回、城南島では合計31回、係船場では37回行った。その結果、城南島では32種1027個体、係船場では17種1091個体が採集された。城南島では12種のハゼ科魚類が出現し、個体数で86%を占めた。係船場では、マハゼが1種で78%を占めた他、カタクチイワシ(12%)、ドロメ(3%)などの個体数が多かった。個体数と種数は両方の場所で3月から6月に多かったが、わずかな魚類が採集された1993年の8～10月(係

船場)を除くと、8月から12月(係船場では1月まで)まで全く魚類が採集されない期間があった。出現種の多様性を両方の場所で比較すると、城南島の方が高かった。城南島では底生性魚類の種数が多く(25種 vs. 9種)、また、出現種の77%が3か月以上続けて出現しなかった(係船場では50%)。さらに係船場では、2月から7月まで隣り合う月間の種組成の類似度が高い値で推移した。

これまで本邦の沿岸各地で灯下採集を行った研究があるが、8～12月に魚類がほとんど採集されないという例はない。この時季にはサッパ、マゴチ、コトヒキなどの出現が予想されるがそれらが出現しておらず、このような現象が起こった要因は不明である。また、城南島では底生性魚類を中心に短期的に出現する種類が多いのに対し、係船場では種数は少ないものの主に長く滞在する種で構成されることが明らかとなった。

**キーワード:** 東京湾, 灯下採集, ハゼ科魚類, 季節変化